

令和5年度研究プロジェクト研究活動報告

研究種別	■自主研究 10	公益目的事業 17
主査名	苦瀬博仁 東京海洋大学名誉教授	
研究テーマ	非日常の活動におけるロジスティクス研究の役割と範囲	
研究の経過（4月～9月）： <p>本研究プロジェクトの目的は、学際分野であるロジスティクス研究の特徴を、周辺研究分野との比較の中で明らかにすることである。</p> <p>今年度は、上記の目的の達成に向け、過去2年間の成果もふまえつつ、以下の2点に取り組むことで、学際分野としてのロジスティクス研究の特徴と役割について理解を深めるとともに、学問領域を明確にすることで、ロジスティクス研究の発展の基礎としたいと考えている。</p> <p>(1) ロジスティクスの学際的な特徴の再整理：日常か非日常か、また人の交通か物の交通か、という新たな分類軸にもとづきロジスティクスを捉え直し、ロジスティクス研究と周辺研究分野の比較研究の枠組みの精緻化を図る。</p> <p>(2) 非日常の活動におけるロジスティクスの役割と範囲の導出：具体的には、災害（地震、洪水、コロナなど）を研究対象とする防災計画や、観光・文化（観光地、神社仏閣、イベント、冠婚葬祭など）を研究対象とする観光学などに着目し、それらの分野におけるロジスティクス研究の位置づけ及び役割を明らかにする。</p> <p>具体的には、2023年7月24日に第1回研究会を実施した。この第1回研究会では、主査（苦瀬）が、「令和5年度研究プロジェクト応募用紙」のほか、ロジスティクスとパラダイムシフトに関する討議資料、ロジスティクスの学際研究に関する全体像に関する討議資料を用いて、本研究プロジェクトの目的、問題意識、取組内容などについて説明し、研究メンバー間で意見交換をおこなった。</p> <p>意見交換では、以下のような論点について議論をおこない、研究内容の理解の共有に努めた。</p> <ul style="list-style-type: none">・ロジスティクスシステムの矛盾の要因：商流の最大化と物流の最小化・ドイツにおけるアイテム数管理の事例・パラダイムシフトの判断基準・産業構造の変化がロジスティクスシステムに及ぼす影響・物流の2024年問題と荷主の責任 下期へ向けて（課題等）： <p>下期では、すでに、第2回研究会が2023年10月19日に開催予定であるほか、第3回研究会を2023年12月に、第4回研究会を2024年1月に、第5回研究会（報告書検討会）を2024年3月、それぞれ開催を計画している。コロナ禍ではあるものの、Zoomも併用することでほぼすべての研究メンバーが議論に参加できており、大きな課題は見受けられない。下期も上期と同様に、本研究プロジェクトを着実に遂行してまいりたい。</p>		